

# 令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

## 事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【京都市】

学校名【 松尾小学校 】

1 実践テーマ	I・II・(III)・IV・V（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	京都市立松尾小学校 5年生 99名（育成学級2名含む）
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（ 総合～共に生きる～） ② 行事名（ ） ③ その他（ ） (2) 地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	・障害についての理解と認識を深める。 ・共に生きていこうとする態度や心情を育てる。
5 取組内容	1 事前に行った授業 (1) 車いす体験と介助体験 車いすに、2人1組で「乗る」と「押す」両方を体験。車いす用のゆるい上り坂と下り坂があり、砂地は進みにくいことや、段差や狭いところは、なかなか困難であることを実感していた。4年生の時にも、車いす体験をしていたため、スムーズに操作する子が多かった。経験は大切である。 (2) DVD 視聴「車いすを翼にかえた男～パトリック アンダーソン～（42分）」 車いすバスケットボールのDVDを視聴した。映像を見て、車いすバスケットがどのようなものであるかがわかるとともに、その迫りに圧倒され、興味が高まった。振り返りシートには、車いすは、足の不自由な人にとって、とても大事なものであるということや、足をなくしても、とても前向きで心が強いと感じた・・・などの感想を書いていた。 (3) 当日（10月2日） ① 選手・コーチの紹介 ② 車いすバスケットの紹介 ③ 車いす体験 9コース ④ 車いすバスケット 3試合



	<p>⑤ 選手のお話 ⑥ 記念撮影</p> 
<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に行った2つの授業は効果的だった。障害への理解と、車いすバスケットへの興味が高まった。</li> <li>・普通の車いすと競技用の車いすとは、幅や重さ、形など、様々なところに違いがあることに気付けた。</li> <li>・実際に、全員が体験したことで、その操作の難しさを実感することが出来た。</li> <li>・車いすバスケットを存分に楽しんだことで、障害のある方も自分たちも繋がれたという気持ちが強くなった。</li> <li>・最後に、選手の方のお話を、じっくりと聞いたのがよかった。なぜ、事故になったのか、いつ何時、誰に起こるか分からないということや、バスケットを通して明るく前向きになったということ、とても分かりやすく子ども達に話して下さったことにより、共に生きる社会について深く考えることが出来た。</li> </ul>
<p>7実践において工夫した点(事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前学習を取り入れたこと。</li> <li>・総合学習で、共に生きる社会とはどういうことかを追求するために、車いすバスケットボールを位置付けた。今後、共に生きる社会の実現のために、何が出来るのかを考えるよいきっかけとなった。</li> </ul>
<p>8主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前学習の効果もあり、車いすバスケット体験希望者が非常に多かった。御厚意で、メンバーチェンジを可能にいただいたおかげで、多くの子が希望を叶えることが出来、非常に喜んでいました。</li> <li>・今年は、新型コロナウイルス感染予防のため、児童全員が軍手を使用した。シートは使用の度に、消毒を行った。</li> <li>・体育館の位置が2階のため、選手控室から体育館までの移動で、階段介助の人数が最低4名は必要。</li> </ul>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>本校は、総合学習で、5年生が福祉について学ぶ。児童が実際に、学校や地域には、点字ブロックやスロープなど、みんなが住みよい町になるための工夫があることを知ったり、点字や手話、認知症サポート、そして車いすバスケットボールを体験したりすることで、もっと誰もが住みよい町になるために、自分たちにできることはないかと追及するとともによい機会である。よって、毎年、実施出来ることを望む。</p>